

由田欣一

（平成三十一年四月号）

年明けてきのふはずでに遠い過去いろはに散りて遊ぶ雀ら

御居処とふ古びし言葉思ひ出すふつくらどしり鏡餅坐す

粥占ひの神をはべらせ七草のうすきみどりを吹き寄せてをり

酒仕込む寒の神事の笛ひよろり酒好きの神あつまる気配

いい酒にいい当てありていい話 毀誉褒貶の外に置かれて

初夢の短歌の神に愛されて雑煮のなかに溺れゆくなり

くたぶれしものより沈みゆくおでん夜長にひとり品定めせむ

平和ぼけもいいではないか平成のいくさ無かりし初春の空



●作者の言葉

今回の受賞に驚いています。老いぼれの面子を立て短歌の神のおめこぼしかと思つています。また先生には毎月歌会

でご指導を頂いていますので多少の匙加減もあつたのではと恐縮しております。正月気分ではふはふはと詠んだ作品なので、あちこちに破

綻が見え隠れしているかと思いますが、誠に有難うございました。年齢なんかには負けないでもう少し頑張れとお励ましの受賞と受け止め、今後とも努力してゆく所存であります。

●選者の言葉

四月号の選歌ルームで記したように、作者の表現力は図抜けている。「御居処とふ古びし言葉」は「おんいどころ」と読むことを初めて知った。下句がまた鏡餅を確と「ふつくらどしり」と詠まれているのも、老齡に達した方の経験から生まれた形容であろう。

「いい酒にいい当てありて」の初句二句も、酒党なら誰でもそう願うであろうことを単純に詠んでいながらとても良い。金沢の方、鰻うなぎなどいい当てであろう。塩分が強いのはへしも思い出す。鯖の塩漬けなので血圧の高い方には向かないだろう。

「くたぶれしものより沈みゆくおでん」も、その通りながら頷いてしまふ。お麩か豆腐の油あげのような品であろう。品定めしながら、それでもすぐに口に入れることはしない。高齡に達した方の悟りともとれる一首。